

平成 24 年 11 月 17 日

## 2012 PKETA International Conference 派遣報告書

九州産業大学 柿元 悦子  
西南学院大学 ペニントン 和雅子

2012 年 10 月 20 日 (土) 韓国釜山広域市の釜慶大学校 (Pukyong National University) に於いて、2012 Pan-Korea English Teachers Association (PKETA) International Conference が開催された。大会テーマは、Perspectives and Directions in Qualitative Research for English Language Teaching and Learning であった。

前日の 10 月 19 日 (金) には午後 6 時から招待講演者などを対象としたレセプションが開かれ、我々も手厚いもてなしを受けた。10 月 20 日 (土) 当日は、午前 10 時から、大会実行委員長の Mae-Ran Park 教授、PKETA 会長の Sang-Ho Han 教授等の挨拶をもって本大会が開始され、4 つの基調講演、4 つの Featured Presentation、及び 60 の研究・実践発表が行われた。

基調講演は、まず、Suzanne Miller 教授 (State University of New York, USA) による、“Qualitative Research for Language Teaching and Learning”という演題のものであった。Miller 教授は、英語教育研究の分野では、今後、量的研究だけではなく、質的研究を増やしていくべきであるとし、その理由を 10 項目に分けて説明した。具体的には、従来の Input / Output 理論に基づく英語教育では、各教育環境や学習者に適切な教育方法を提供できないこと、学習の結果よりも学習過程に注目すべきであること、教師が学習者の多様性を理解すべきであり、質的研究を行うと教師の意識が高まること、また教師は学習者各自の問題もしくは、学習環境毎の個別の問題を知る必要があること、教師と学習者の関係作りのために質的研究は役に立つし、質的研究でないとその効果を報告しづらいこと、などについて述べられた。

次の基調講演者は、Barbara Dennis 教授 (Indiana University at Bloomington, USA) で、“The Yin and Yang of Language Education Research in Korea: Is There Place for Qualitative Research?”という演題の講演であった。陰陽 (Yin and Yang) のシンボルは、対立する二つの力が調和のうちに共存するという意味を表すという理解のもと、アメリカにおける従来の英語教育研究の流れを分析した。つまり、質的研究を陰 (Yin) とすると、量的研究は陽 (Yong) ということができ、この二つは従来調和することがあまりなかった。しかし、Dennis 教授は、質的・量的研究は互いに補完し合うものであり、調和のもとに両者を用いて、より明示的に教育の過程や結果を提示していくべきであると述べた。

午後の第一基調講演者は、Park Won Chul 氏 (English Mou Mou) で、

“Practical Practices of Reading and Writing for Korean Elementary School Students”について報告があった。次に、Annette Wyandotte 教授 (Indiana University, Southeast USA) が、“Action Research, a Trustworthy Tool for Scholarly English Teachers to Engage in Scholarship of Teaching in Their Classroom Settings”という演題で講演した。

4つの基調講演後、4つの Featured Presentation が同時になされ、柿元が“Study Abroad Programs to Enhance Communicative Competence Based on Principles in CEFR”という演題で発表を行った。複数の留学プログラム参加者を比較した結果、ホームステイ等によってより深い体験をした学習者ほど、帰国後も学習意欲や異文化に対する関心が高いことから、アジア圏での相互交流の意義を指摘し、CEFR の理念をアジア圏の大学でいかに応用するかについて発表した。参加者との間で質疑応答も活発に行われ、同様の研究課題を持つ韓国研究者と今後の協力を約束し合うことができたことは収穫であった。

Featured Presentation の後は、10の会場で研究・実践発表が同時進行で行われた。ペニントン氏は、“Exploring Possibilities to Apply Critical Thinking Theory to EFL Instruction: Developing Autonomous Learners”という演題で、クリティカル・シンキング理論、特に Bloom’s Taxonomy を英語教育に適用する可能性について発表した。学習者が自己の学習過程を自律的に考え、モニタリングしていく方法と、実践結果について述べた。

閉会式は、午後6時20分から行われ、実行委員長、PKETA会長の挨拶を始め、Raffleを実施するなどして盛会に終わった。

全体としては、基調講演、Featured Presentation、研究発表件数が多く、質の高い大会であった。同日にソウルで別の英語教育学会が開かれていたため参加者数は予想を下回ったようだが、大変きめ細かく行き届いた運営がなされ、充実した大会であった。

以上、ここに報告申し上げます。